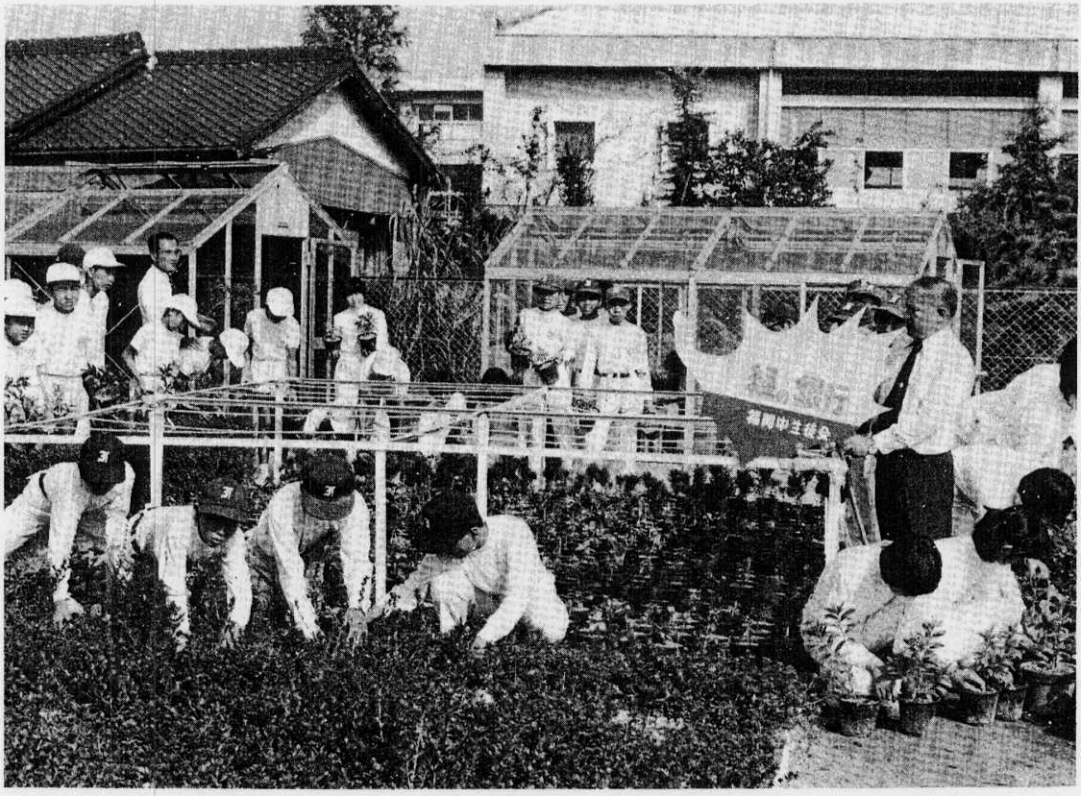
春秋二回のさし木作り
あじさい・さつき・つばき
きょうちくとう・あかめ・ばら……
足の踏み場も無い程のトロ箱の行列
ぎっしりつまった若芽
毎年行う一万本さし木運動だ

二年苗三年苗
生き生きと緑の芽の伸びた苗木は
各公共施設をはじめ
学区内各家庭の庭を飾る
あじさいの里づくりに
緑の銀行の大切な役目だ

水を欲しがる肥料を欲しがる
若い苗木は無言の訴えをする
夏は水秋は肥料冬は温度
根本すっきり除草の世話
見事に咲く花も手入れ次第
生活に潤いと安らぎを与えてくれる
かわいい仲間たちだ

昭和56年２月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会



（どんな花が咲くだろうかな－福岡中）

—教育随想—

自然に還る

都築孝太郎

少年自然の家開所以来四年目を迎えたある日、某氏の紹介で備前焼の窯元を訪ねる機会を得た。

作業場、窯場、展示場を見学した折、「これが何百万円」「あれは六十万円位」と、いやに金のことが耳に残った。

備前に移る前に栄えたといわれる虫明焼なども見学し、それなりの面白さを味わわせて貰った。しかし、何かもの足りなさを感じ、かつて耳にした古備前の研究に情熱を燃やしている森陶岳氏のことを尋ねたら、「あれは変わっているから会ってくれませんよ」とのこと。

そう言われると何とかして会ってみたくなった。たとえ会えなくとも、五十米の半地下式の登り窯を見るだけでもと思い、その所在地を聞いた。

相生市の山中で、彼の窯場を見つけるにはそれほど時間を要しなかった。案の定、「面会おことわり」の立看板があり、周囲は有刺鉄線が張り巡らされて入ることができない。

村人の助けを借り、間道から彼の庭内に入ることができた。扉は全部施錠してあって、ここも外来者を拒否している。かすかに流れる音楽に彼の在宅を知り、思い切ってノックして面会を求めた。

闖入を詫び古備前焼の話を願ったところ快く応じてくれた。今回の大窯焼成のねらいは、これから何をやろうとしているのか、現在の備前焼が曲り角に立っている姿など……。風邪気味で休んでいた彼が、午前一時近くまでお話をしてくれた。九年間社会からも家族からも離れて独り没頭したものは何であったのか。

森家はもと備前六古窯の一つとして名をなしていたのが、彼の研究が始まって以来、主だったものは全部売り払って研究に注ぎ込んだとか。（一体生活はどうなっているのか遂に聞かなかった。）

今回の大窯焼成には窯土三百トン、青松葉一トン、赤松三百トン、焚き日数五十五日、最高燃焼温度一二七〇度、作品数大甕四十八を含め四百余点。偶然にも窯出し二日前に訪ねられたのも幸いだった。「こんな大きなことをやって自信はあるんですか」の問いに、「失敗はしない心算です」と。今日まで何回も窯を作って試験済みとのことであった。二か月の間一度も布団の中で寝ることなく、窯を離れず仮眠して作業を続けてきているエネルギーと、命をかけている情熱には全く驚嘆の外ない。

五十五日でやき上げたのは、一千年に亘る備前焼の歴史の中で、最盛期といわれている文禄、慶長の頃の大窯で、あの力強い四石入りの大甕や茶器の数々が、どのような原土で造られ、どのように窯詰めされ、どのように焼成されてきたかを森氏自身実際に体験してみたかったに外ならない。そして古備前のうちに、最も自然なものを感得したに相違ない。

この自然の感得が、今日の備前焼から明日の備前焼に必要とされるのであろう。これは作陶家を志した彼としては、どうしても通らねばならない宿命でもあったようである。

この試作が終わって六年後には、もっと大きい窯に挑戦する計画とのことであった。何の苦労も知らず、時代産業の波に乗って作陶している者の多い中に、好漢森氏に会えたことが、何にも増して楽しかった。「自然に還る」熱意と勇気をしみじみ知った。

（岡崎市少年自然の家、所長）

スペイン
—ゆったりしています—

鈴木依治

スペイン人は小柄で、彫の深い顔はいつも好意に満ち、にこやかである。

スペインは十年来、教育改革を進めている。古く重い足枷をひきずりながらも、明るくのびやかに見えた。

義務教育（八年間）の就学率は、と聞く。「ほぼ満足点である」。貴校の在籍数は。「およそ三百人である」。EGB（基礎学校六～十三歳児）六年生の週授業数は。「およそ二十五時間である」

こんな答えが、文部省の視学官と同席している校長から返ってくる。スペインでは、人間の営みは、紺碧の空と乾いた明快な風土とはいささか違う。もやをとおして錦なす山を眺めるようで、どうも輪郭がはっきりしないのである。

土、日曜日には史蹟を尋ねた。小型貸切バスを契約したのに、ホテル横付けの車は、五十人乗りの豪華なものである。一行は十人。契約違反をなじるが、恰幅がいい案内人はにこやかに、この車は快適でよろしい、乗れ、という。外貨を観光

— ふるさとの山河 —

明大寺町踊山

明大寺町踊山はどこですか？と尋ねられても即座に答えられる人は少ないと思う。けれども名鉄東岡崎駅より西に一つ目の小さなガードをくぐり、まっすぐに岡崎高校へ向かって行く上り坂と、途中で六所神社へ向かう東西方向にある路との交差する辺りであるといえばほとんどの人にわかってもらえると思う。

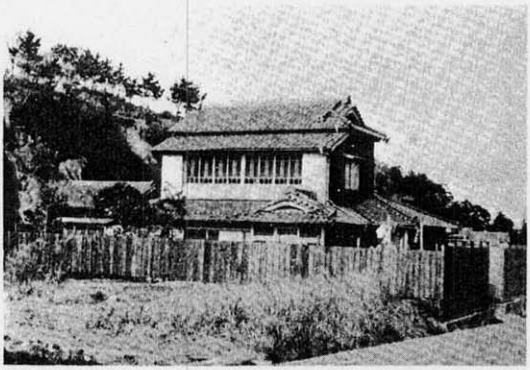
踊山の地名の由来は残念ながらはっきりしないが、耳取や狐塚など鎌倉街道の道すじの地名とともにかなり古い。戦国時代には今川方と松平氏との勢力争いから、しばしば戦が行われたところでもある。

地元の古老お二人（川辺さん、七十六歳・大久保さん、八十一歳）のお話では現在の国立分子研究所の正門付近には何と旧岡崎町営の火葬場がおかれていたことや、また川辺さんが二十五歳ごろには近くでキツネを飼育していた人もいたそうである。最も興味をひかれたことは、旧三島小学校が戦前まで位置していたところ、いわゆるみどり橋辺りには大正時代の終わりごろから昭和の初めにかけて草競馬場が小学校と並んで存在していたことであった。そこでは当時かなり遠方からも馬をつれてきては乗馬の練習が行われていたとのお話であった。ただ現代の競馬場のように種々の施設が完備したものではなく、全くの草競馬場であった。

この踊山一帯は、戦前までは岡崎市内の富裕な人びとのいわゆる別荘地として開拓されて来たようである。あの岡崎高校へ向かう坂道には当時まだほんの数軒しか人家らしいものは見当らなかったという。しかし一方では踊山を中心に古くから教育施設は次々とつくられてきており、岡崎の教育の一大拠点として大いに拓けたといってよかろう。旧三島小学校をはじめとして、戦後は新学制発足に伴う竜海中学校の建設や、三島小の現地点への移転となり、さらには愛知学芸大学から教育大学へ、そして最近では超近代的な分子研への移り変りを見たとき、まことにこの地は文教地区として発展を重ね、今日に至っているといえよう。

ただお二人の古老も言っておられたが教育大学が刈谷市へ移転してしまった点については何とも残念でならないとのことである。それはこの踊山の坂道がお二人の若い時代に、岡崎中学、学芸大学の学生たちでにぎわい、その姿がいまだに深く脳裏に焼きついているからかも知れない。現代の若者にとってもこの踊山の坂道はやはり青春時代の想い出として末永く心に残っていくことであろう。

（竜海中　中島　泰）



資源に頼るスペインである。不満をにこやかな顔で包み、高料金覚悟で出発。

二日間の史蹟探訪を終わり、請求書を見れば契約通り。恰幅抜群の案内人は、歴っきとした貴族、伯爵さまであった。

（竜美丘小長）

パリ
—荷物騒動記—

山崎直美

十四日間の旅の前半をスペインで過ごした後、いよいよ友の待つパリへ。一昨年、日本を離れた友人との再会に胸をワクワクさせながらオルリー空港に到着しました。ところが待てど暮らせど私のトランクは出てこないのです。

日本からのお土産も、着替えも化粧品もすべてトランクの中。なんという不運！ホテルで待っていてくれた友とは感激の対面になるはずだったのに、いきなり泣き出しそうな顔ですがりついた。なんとも絵にならない再会になったのです。

さて、それからが大変。なにしろ、あるのは貴重品と着ている物だけ。まず生活必需品を買わなければなりません。（歯ブラシ一本六〇〇円、高かったなあ。）それからトランクの行方を追って、空港や航空会社を東奔西走。ベルサイユ宮殿もセーヌ川の遊覧船での豪華な食事も夢で終わりました。結局、トランクはどこを旅してきたのか、私が日本に着いて三日後、無事帰国して参りました。

（岩津中）

1

岡崎再見 27 鬼まつり

天下泰平・五穀豊穣を祈るこの祭りは旧暦の正月七日、境内を火の海とする勇壮な祭りとして、各報道機関を通しても広く紹介されているところである。

この祭りの起源は、源頼朝の祈願から始まったと伝えられ、以後鎌倉・室町を経て江戸時代にいたり、三代将軍家光以後は、幕府の行事として、いっそう厳かにかつ盛大に行われるようになった。

旧暦の元旦から七日まで、本堂で修正会が行われ、鬼祭りは、その結願の日（七日目）の晩に行われるいくつかの行事の総称である。

この鬼祭りは、次の六つの行事から成っている。午後二時よりの十二人衆の饗応、四時からの行列、六時からの仏前法要、鬼塚供養、庭祭、そして八時からの火祭りである。

特に火祭りは、暗闇の中にたいまつの火が乱舞し、追われて踊り回る祖父面、祖母面、孫面がその火に照らし出されてそれは壮観である。まさに、勇壮にして美麗なる一大奇観でさえある。

その昔、滝山寺付近の十二の谷からそれぞれ一名ずつ出て、この祭りに出仕したといわれる十二人衆の服装や古いことばは、鎌倉・室町時代のものがそのまま伝えられているという。

鬼追放により平和な新春を迎えようとするこの鬼祭り、今年ももうすぐである。

2

①鬼祭りのハイライトが、この火祭りである。柏子木の音を合図に内陣では半鐘、双盤、太鼓などの乱打が始まる。祖父・祖母・孫の三鬼は、数十人のたいまつを持った若者に追われ外陣に走り出るのである。夜空をこがさんがばかりの火の饗宴は勇壮そのものである。

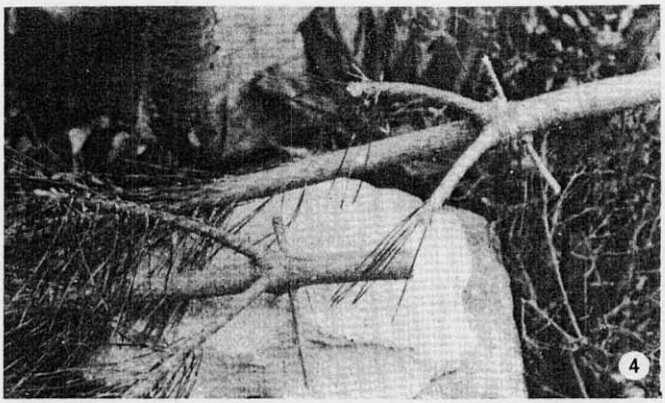
②本堂正面を照らす二基のたいまつは二メートルを越す大きなものである。この他に、三鬼を追う若者が持つたいまつが十基ほど作られる。

③鬼祭り六つの行事のうちの一つに鬼塚供養がある。これがその鬼塚で、塚の大松は昨年マツクイムシにやられてしまって、今はその根だけになってしまった。

④山から男松と女松とを一本ずつ切り取ってきて「牛」を作り、「雄牛」「雌牛」とする。夕方、お薬師さまへ行くとき、表参道の五十五段の石段の下の両側に牛を一つずつ置き、本堂へ登っていくのである。

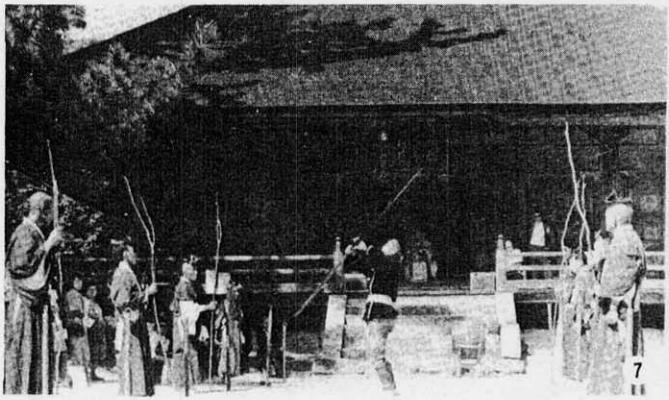
⑤祖父面、祖母面、孫面を付ける三人の役男は、身を清め、火祭りでの出番を待つ。

⑥⑦大法会が終わると庭祭をおこなう。胴服姿の東次郎、西次郎は、本堂正面で長さ七尺五寸、重さ三貫の大薙刀を振り回し、東西の悪魔を切り払う。次に素襖姿の福太郎コツボメの二人の兄弟が正面に出て一年間の田遊をし、五穀豊穣を祈る。


4

5

6


7

3

教育日々

魚と子ども

美川中　鈴木笑子

「先生、教室に水槽持って来ていーい。」

「だめだよ。魚をかうなんてすぐ死なせちゃうから。」

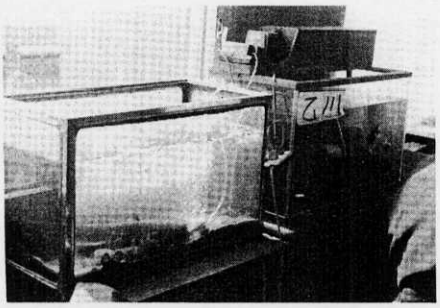
しかしS君の熱意にとうとう負かされてしまった。魚の管理はぼくが責任を持つからと、早速水槽が教室に持ち込まれた。これはみどりの地球「私たちの環境調査」という番組をみて、学級全体で乙川の水質調査をすることになったのが原因である。夏休みにそれぞれの学区に分かれて、各学区に住む魚を調査した。それをもう少し発展させてみようということで、ゆとりの時間を使って、乙川に住む水生昆虫などをみんなで調べに行くことになった。

「あっ、これヒラタドロムシじゃない。」

「きもち悪い。なんか虫がついているよ、この石。みてみて。」

あちこちで歓声があがり、あっという間に石や虫でリャカーいっぱいになった。魚もいっぱいとれた。早速、学校に持ち帰り、水槽に入れてみた。が、まもなくほとんどが死んでしまった。酸欠である。ヒメタイコウチに食いちぎられた魚もあった。

しかし、この時、S君たちは私の知らない間に、思いもよらぬ行動に出た。S君たちが中心となって、もう一つの水槽とろ過器を買おうということを決めた。それがクラス全員のカンパ作戦の開始であった。水生昆虫や魚の死因の解明とその対処のすばやさには恐れいってしまった。



しばらくしたある日、水槽の中をみるとフナが白い粉をふいたようになっていた。

「先生、塩持ってきてよ。これカビだよ。」

次の日私が塩を買ってくるとすぐにS君たちはフナを一匹一匹ていねいに洗ってやった。

数日後、水槽に垂らした釣り糸を見て、私はまたびっくりした。

「だれ、こんないたずらするのは。」

というと、

「先生、水のよごれをみるために入れてあるんだよ。」

と即座に答が返ってきた。彼らの熱意と知恵に私は感心するばかりであった。

十二月に入り、魚はじっとして動かなくなった。そしていつの間にか水槽からは魚の姿がみえなくなった。魚は彼らが川にもどしたのだという。

永遠の疑問符

美合小　夏目達彦

「詩は志ならん」とある詩人は断定する。しかし「ことば遊び」としての詩も絶えることはない。私ははたと立ち止まる。

子どもとともに詩を読み、詩をつくり、うなったり、笑ったりしてきた二年間。私は幾度となく足を止めては思案したものだ。しかし答えはでていない。それでいいのだと言いきかせて、また詩を教える。

「石垣りん？へんな名まえだ。」と腹をかかえていた子も、今では石垣りんの大ファンだ。「峠」の読解が彼らに与えた影響力はまことに大きい。

「先生、石垣りんの詩をもっと教えて。」

うれしい悲鳴である。

ところが片方では、

とうとう矢印になってきいている　海はあちらですか

と　（まどみちお）

の題名あてに熱中する。

「するめ？あっそうか。」

「先生、もっと他にないの。」

ここではもう、詩は遊びとなり、ゲームとなる。

私は子どもに、詩とはこういうものです。と説明しない。いや、できないと言うべきか。

今、教室は、子ども詩人でいっぱいである。自分の願い、不安をわかってもらおうとして詩を綴る子、なぞめいた詩をつくっては喜んでいる子。しかし彼らは、むしろ創作よりも、多くの詩に出会うことを欲する。たぶん私がそうであったように。

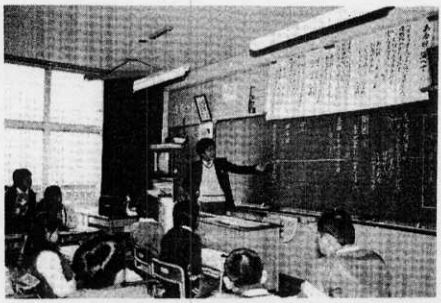
二年間つづいてきた「今月の詩」には、必ず傾向の異なる二、三編の詩をのせている。子どもたちはとびついてくるのだ。そして思い思いの感想を口にする。

「なんだ、これ。これでも詩か。」

「わけがわからん。はっきり書きゃあいいのに。」

私はこんなとき、子どもと共通の課題（詩とは何か）をもっていることに誇りさえ感じるのだ。私もまた「閑吟集小歌」の一節、むらあやでこもひよこたまにかくされた思いを今だに解せぬままにいる。

しかし、詩の真実もなぞではあるが、「子どもとは何か？」という問いもまた、永遠であろう。



おしらせ

須淵に二五七名が参集

第七回冬季研修会

第七回冬季研修会は、十二月二十五日より三日間、少年自然の家で開催された。

数年ぶりの寒波の中、市内や県内外から二五七名が須淵の里に参集、森信三氏の講演を皮切りに、講演会や分科会と終日熱心な研修が行われた。

特に分科会では、参加者の間で活発な質疑が交わされ、時間が超過する充実ぶりであった。

■教育研究論文の応募状況

昭和五十五年度の岡崎市教育研究論文の教科・領域の応募点数は、次のとおり。

△小学校（三一二点）

国語（書写）72／社会34／算数36／理科27／音楽12／図工11／体育21／家庭4／道徳6

△中学校（九四点）

国語10／社会9／数学12／理科10／音楽4／美術18／体育27／技家11／英語7／特殊1

特活13／保健2／視聴覚2／教育一般4。

■昭和55年度 愛知県教育研究論文入賞者

第14回愛知県教育論文の審査が終わり、このほど入賞者が発表された。本市関係の入賞者は次のとおり。

▼優秀賞

「学習問題を計画的に追求する授業の創造」

葵中学校社会科部会

▼佳　作

「自ら考え追求しようとする態度を育てる指導法の追求」

―指導計画の検討を通して

葵中学校　山内博史

「豊かな経験を求めて」―全校体制で取り組んだ〝みどりの地球〟―

美川中学校「みどりの地球」部会

■体育優良校に二校

平素の体力つくりに実績をあげている梅園小学校と矢作中学校は、体力テストの成績と総則体育実践の成果が優れていることが認められ、去る一月六日、県教育委員会より体力優良校として表彰された。

■県自作TP作品審査結果

県教育サービスセンター主催の自作TP作品募集において、次の先生が入賞された。

▽特　選

竹内順子（特活・細川小）

【寄贈刊行物・資料等】

◇**連尺の教育**―人間性を育てる全人教育の実践―連尺小学校　A5判・二二二ページ

◇**考える力の開発をめざす学習指導**―観察と表現をめぐって―　愛宕小学校　B5判・二〇〇ページ

◇**視聴覚機器を活用した学習指導**―学習意欲の向上をめざして―　三島小学校　B5判・九六ページ

◇**理科の研究**　第二十一集　岡崎市現職教育委員会理科部（小学校）　B5判・九六ページ

▽入　選

長坂則彦（社会・大樹寺小）大村寛（社会・矢南小）杉山隆之（大樹寺小）明保恵子他二名（理科・三島小）奥平辰弥他三名（理科・三島小）香村敏之他一名（特活・大樹寺小）佐野るり子（特活・美合小）市川敏雄他五名（道徳・大樹寺小）平岩昭（数学・岩津中）明保俊通（理科・矢作中）二村邦彦（技術・福岡中）

▽佳　作

成瀬安子（矢南小）他十一名

■県読書感想文コンクール成績

県優秀賞　柴田明希子（城北）

優秀賞　杉浦則子（連尺）三浦泰弘（愛宕）

優良賞　和田こずえ（根石）岡本倫明（連尺）小嶋里美（岩津）佐野清子（岡崎）鈴木由美子（生平）近藤聡（連尺）杉本彩（愛教大附）近藤尚子（竜美丘）榊原順子（根石）金田聡美（三島）浅川朱美（城北）

佳作㊥合津里美（大樹寺）外五名

佳作中村俊熙（葵）外三名

■岡崎市小中学校書きぞめ展

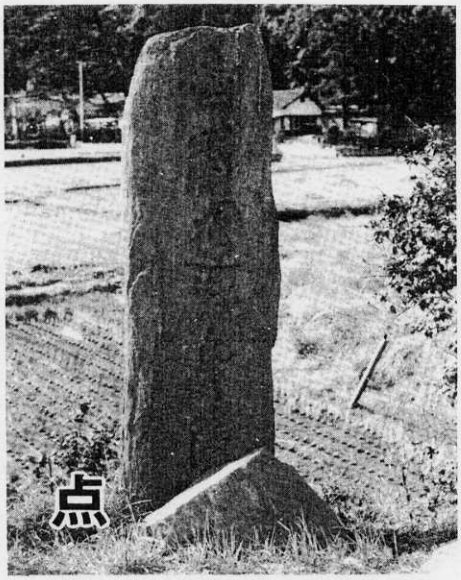
岡崎市小中学校より優秀作品二一〇四点を一堂に集めた書きぞめ展は、去る一月十四日～十八日の五日間、市美術館において行われた。特に今年度より奨励賞が設けられ、二〇二点の作品に贈られた。

昭和56年度　研究発表校の研究動向

校名	主題	予定日
常磐小	豊かな自然と文化を生かす教育課程の研究―基礎学力の育成をめざして―	6月5日
生平小	語いを豊かにする指導法	6月23日
六名小	確かな読みの力をつける授業過程	9月25日
岩津小	お金や物を大切にする態度の育成―金銭教育―	9月
竜美丘小	追究する力に培う学習指導―観察と表現―	10月13日
井田小	太陽と土に親しみ、自ら動きづくりに励む子の育成をめざして	10月20日
常南小	「できる喜び」を追求する教育活動―ゆとりの時間の実践―	11月6日
矢北小	言語環境をととのえる―美しく豊かな話しことばを求めて―	11月10日
常磐中	ゆとりの時間の活用と実践―地域素材を生かした学習を通して―	11月27日

※岡崎小　健康教育（6月）
甲山中　東海北陸地区技家研究会（10月）

鳩ケ窟碑



所在地―岡崎市舞木町

名鉄山中駅から西へ一キロ、国道一号線の南に山中八幡宮がある。一号線から山中八幡宮へ入る小道の片隅に黒っぽい自然石の石碑が立っている。

碑面には「御開運御身隠洞」と刻まれている。通称「鳩ケ窟」の石碑である。

永禄六年（一五六三）、三河各地に起こった一向一揆との戦いに敗れた徳川家康は、山中八幡宮境内の洞窟に逃げかくれた。追手の兵がこの中を探そうとした時、洞窟の中から二羽の白鳩が飛び立った。追手の兵たちは「人のいる所に鳩がいるわけはない」と言って、囲みを解き、立ち去ったため、家康は難をまぬがれたという。

以後、この洞窟を「鳩ケ窟」といい、八幡宮の山を「御身隠山」と呼ぶようになった。

この碑は文政四年、（一八二一）に地元有志の人々によって建てられたものであり、碑裏面には家康の従者、朝日忠三郎源近周はじめ三十五名の大衛士の氏名が刻みこまれている。

●カット　福岡小　深谷友一

オアシス

「おいでん。」「おまん。」岡崎弁は「お」や「ん」がよくつく。のんびりとまのびしたような話し方でついひきずりこまれるような温かさを感じた祖母のことば。

この頃はそのやわらかさが感じられないのは、岡崎も都市化して各地から流入混合された何々風岡崎弁となったからか。

自然の猛威を改めて知らされながら迎えた八一年も、もう節分、立春の季節となった。

消費生活に浸り、国際情勢に一喜一憂する生活の中で、自然を疎んじた私たちにはよい教訓であった。自然に親しみ、自然を恐れる教育だけは失いたくない。

下萌や薪をくづす窓あかり　犀星

赤提燈で同僚と一杯やってタクシー帰り。運ちゃんと陽気にしゃべりまくった。「僕の商売、分かるかね。」「そうだなあその服装からだと、学校の先生ってとこかな。」「服装？」「お客さんの背広の型は、相当前のですよ。」ああ、何てみじめな気持ちだ。それにしても、背広に流行があるのかね。油断できない。

好きこそ物の上手なれ。先達や専門家の中には、子どもの頃の先生の「ほめ言葉」や「励まし」が、その道に入る意欲を育て、それから好きになった、無中になったと聞く。

今や、学芸会・就職進学シーズン。多忙の中でこそ、ひとりひとりの子どもをよく見、励まし、ほめてやりたい。

この本を

○日本の教育	角間　隆	
伯成出版社		980円
○校内研究のすすめ方	福岡県教育研究所連盟編	
第一法規		1,800円
○戦後思想を考える	日高　六郎	
岩波書店		380円
○日本生存の条件	村上　薫	
サイマル出版社		1,200円
○油　断	堺屋　太一	
日本経済新聞社		850円
○真実の学校	高井　有一	
新潮社		1,200円
○砦なき社会	西丸　震哉	
P.H.P		880円
○下駄の上の卵	井上ひさし	
岩波書店		1,500円
○学校教師論	三浦　修吾	
玉川大出版部		1,800円
○日本診断	松山　幸雄	
朝日新聞社		900円